

JAITIとは、「財団法人日本農業研修協働協力団」の英文、Japanese Agricultural Inservice Training Institute Foundationの漢文字の略で「ジャイチ」と呼びます。1989年、農業を生活基盤とする、開発途上国の農村地域社会の人々が、「生きる権利」の食料を安定確保することで、生活の中に基礎的な教育と公衆衛生に目を向けるゆとりを持ち、健康で、自立心豊かな地球上の「友」になることを願って、活動が展開されています。

発行所 (財)日本農業研修協働協力団
〒386-0502 長野県小県郡武石村沖456
TEL 0268-85-3465 FAX 0268-85-3583
東京連絡所 〒113-0031 東京都文京区根津1-19-3(小林家)
TEL 03-3828-9281 FAX 03-3828-9262

今日のジャイチ

個人行動から出発し、任意団体のNGO「ジャイチ」に移行し、更に、長期安定した活動を目的に、財団法人組織に変更し、運営を始めて十期目に入り、八ヶ月が過ぎました。

今年四月からは、組織が組織として機能する要の事務長に、前号(二〇〇一年七月発行第二十一号)で自己紹介報告しました。岡四郎氏にボランティアで加わって貰い、長野県職員時代の組織運営経験を生かして、日本事務局の業務を進めています。

以下、この六ヶ月間の活動状況を、お知らせします。◆カカニ農場
昨年七月から、自立運営に移管して三年目に入りました。自立運営ですから、



当初目標の施設造りが完了したバシユバント学校全景。この中には、右奥の予定外であった「みすずホール」も含まれている。

当初目標の施設整備は、計画外のみすずホール「講堂兼体育館」の追加建設も含めて、全て完了しました。今後の適切な維持管理体制が不可欠との観点より、

カカニ地域の特産物となった苺は、栽培農家七〇〇戸に達し、生産過剰となり、販売価格もどんどん下落しています。それでも他作物の数倍の好価格であり、生産意欲は落ちません。今後、ジャイチとしては、中東、欧州への輸出を検討研究していた事項を、加速する方向へ努力します。

◆バシユバント学校
当初計画の施設整備は、計画外のみすずホール「講堂兼体育館」の追加建設も含めて、全て完了しました。今後の適切な維持管理体制が不可欠との観点より、

寄生虫検査を軸に衛生教育を、青林大学の春木宏介先生を中心に行っています。今年度も各種助成金申請をするも受けられず、中断すれば、今日迄の成果



農場開設と同時に百葉箱を設置して、以来気象観測を年間二、三日の欠落のみで記録していることを、賞賛する土屋興至農業指導員(右)左は、マン支配人。

が水泡に類すると判断して、八月二十四日から九月二日、春木先生のボランティアで学校に入って貰いました。学校運営費の内、教職員給与、給食費、教材費等々に、国際ボランティア貯金の配分を受けていますが、同一団体への継続支出が見直し段階に入っており、打ち切りになった場合の対応策の検討に取り組み始めています。

ご寄附のお願い

ジャイチの活動を何れも心に留めて下さり、感謝申し上げます。運営されている財源その他について説明を致します。ご協力をお願い申し上げます。

1. ジャイチ基金——財団法人ジャイチの基本的財源の確保
2. ジャイチ維持費——ジャイチの運営維持費
3. ジャイチ事業費
新たに大きい費用のかかる事業を計画した時にその応援費用として確保することを目的としています。

郵便振替 00510-4-65434
銀行振込 八十二銀行九子支店(番) 420577
口座名 財団法人日本農業研修協働協力団
住所 〒386-0502 長野県小県郡武石村沖456
電話 0268-85-3465 FAX 0268-85-3583

尚、金額に関しては規定がございませんので、お知りお知りご自分でお決め下さいますようお願い申し上げます。(例えば、収入の1%を、小遣の1%を、的な考えは如何でしょうか。)

(編集)

カカニ農場に 滞在して

土屋興亜 農業指導員



イチゴ畑の除草(JAITI農場) 近所の女性で毎日来てもらうと1日実労働6時間で45ルピー(日本円で72円) たまに頼むと80ルピー(96円)

ジャイチ・ネパールのカ

カニ実験研修農場の管理運営支援と周辺地帯も含めた作物栽培技術・加工・販売全般について継続的な指導支援を引き受けて、はじめてのネパール、はじめてのカカニ農場訪問でした。

そのため今回は現地の実情、農作物の栽培状況、加工・販売全般にわたる課題や問題点の把握を主目的としました。また現地スタッフ、ジャイチ・ネパールのマン支配人はじめ多くの方々と人的つながりができてホッとしています。

「百聞は一見にしかず」の言葉どおり、頭の中で考えていたとは違った課題がいくつも見えてきました。ジャイチが導入し地域に定着したイチゴはネパール唯一の大産地となり、地域経済を担い、その他のいくつかの品目も定着し、ジャイチ活動の成果に感銘を受け

ました。

この成果をさらに発展させ、維持していくためには土壌の特徴把握と有機質を主体とした土作りと施肥、病害虫対策、ハウス利用による早期育苗、マルチ栽培、輪作体系の組み立て、ほとんど検討済みでしたが新品目の試作選定、新品種対応、新技術導入支援などが重要と思われました。

いくつかの課題についてふれて見ますと、イチゴはここ三十四年急激な伸びを示し、カカニ峠を中心に標高四〇〇mほどの地帯に一〇〇haぐらいは有るので

はと見ました。その経済性の高さから今後さらに増加すると思われませんが、連作障害回避のための土作り、輪作物の選定、輪作体系の組み立てが重要です。大根も完全に定着した品目であり、イチゴ以上の面積があるとされます。品種は

みの早生系で根が大根が好まれるようです。栽培期間が二ヶ月ほどと短期間で他作物との組み合わせから重要な品目です。サツマイモもジャイチが

使いかしの学用品

羽生市立南中学校の活動

「We feel some warm and lovely feeling……」

新しい、流行の物でないのでかえって温かさと愛情を感じます。

これは数年前、ジャイチのバシユバントスクールのリーダー・ダワシユルバ君(当時、六年生)が、本校の生徒会長あてにくれた手紙の一節です。

私どもの羽生市立南中学校は、全校生徒約七百人の大規模校で、利根川をはさんで群馬県と隣接する埼玉

導入し定着した品目ですが、早出しだと一畝、三〇ルピー、遅くなると一〇ルピーぐらゐのことでした。ハウスによる早期育苗、マルチ栽培による早植え、早刈りが課題です。

カボチャ・キュウリ・スイートコーンなども日本の品種は現地のものより味が良く、評価も高いのですが、日本では種子代が問題になるほどではないのに、現地では大金だったというような課題もあるようです。日本でも有機質確保のため有機農業が奨励された時代がありました。大規模専作経営への転換が進み、

一般農家では推肥は購入する時代になっていきます。ネパールでは、ほとんどの農家が牛、水牛、山羊、ニワトリの畜産家で有機質中心の施肥体系であり、日本も見習わねばと思う場面もありました。

販売上の問題では、日本も農産物の輸入問題からきびしい局面にたたえられていますが、ネパールも例外ではなくキウイフルーツなどは中国産の高品質のものが安価で輸入されるなど、むずかしい課題もでてきています。イチゴに続く品目と期待が大きいだけに、今後の動きに目が離せません。

生食に向かないイチゴはジャム加工され、販売されていますが、ジャムは一般的にネパール人の食生活になじまず、外国人観光客などの消費が多いと思われま

す。国王一家惨殺事件に端を発した治安の悪化、テロ事件による国際情勢から外国人観光客の減少が心配されてきました。以上初訪問で感じたことの一端について記しましたが、二〇日余の短期滞在であり、諸課題のごく一端にふれただけと思います。また間違ひもあるかも知れませんが、今後現地へいくたびに課題の把握につとめ、請

先業の萎かれた成果をけがすことのないよう頑張りたいと考えていますので、よろしくお願ひします。
滞在期間 十月二十四日
十一月十四日
土屋 興亜
(長野県望月町)

土屋興亜さんは、昨年三月、長野県農政技術吏員(やさしい・花き専門技術員)を定年退職され、暫く充電期間の予定でしたが、関事務長の強い要請で「国際森林業協力協会の農業専門家に登録、同協会の助成金で派遣されました。

事業の一部にと関わらせていただいたりしています。

生徒達はこの活動の中からも多くのものを学んでいるようです。

小林美智子先生
(埼玉県羽生市)

県北東部に位置しています。羽生市は、田舎の舞台と小説「田舎教師」の舞台となった所で、また、天然記念物「ムジナモ」の白生地としても知られており、自然環境に恵まれた田舎都市です。

本校がバシユバントスクールへ一使い古しの学用品を贈り始める活動を開始したのは七年前、一年毎に入社発する生徒会役員が、先輩たちから引継ぎ、今やすっかり本校の常時活動として定着しています。

活動のきっかけは「お金を稼ぐことのできない中学生である自分達に、できる支援活動は何だろう」という当初の生徒会役員の発想によるもので、ポスター、回収ポスト、呼びかけのちらし等、すべて生徒会の発案により作られ、活動が盛り上げられています。

回収された学用品は一つ一つチェックされ、箱詰めきれいに梱がれ、心を込めて一段ボール箱に詰めていきます。郵送すると多額の経費を要しますが、ジャイチのご好意で、山奥の教室の申まで、手持ちで運んでいただき、「子ども達の手から手へ」を實踐する活動と

「日本の福祉さえできないのに海外支援なんて、という人を時々見かけますが、僕は資源も何も無い小さな島国の日本がこんなに栄えている裏には発達途上国から利益を得ているということもあるし、戦後の貧しい時には日本だって海外から援助してもらったんじゃないかと思えます。僕はもう日本人ではなくて、国際人としての自覚を持つ時期だと思えます。自分の目を世界に向けてみるいい機会だと考えています。」

(3年前の生徒会長
3年男子生徒のスピーチ原稿より)

バシュパント学校 寄生虫調査 (VI)

おり、深度が非常に高い状態でした。今回神戸大学大学院生でありトリブバン大学大学院生でもある古川奈津子さんが学校に同行することとなりました。古川さんは衛生教育の効果について研究しており、自分でもカトマンズに自ら援助している学校を持つている人です。詳しいことは次のホームページでご覧になれます。 (http://phases.nhu.ac.jp/~caisu_sunny/)

古川さんには衛生教育の一部と日本語の授業をお願いしました。衛生教育は一、二学年に、日本語は全学年にお願いしました。その結果私は三学年から入学前までの衛生教育の担当となり、糞虫を中心とした衛生教育を行いました。

今回の訪問で三年が過ぎました。前回ご報告したように児童の寄生虫罹患率は低下しました。ほかのネパールの学校に比べると半分程度でしょうか。今回は寄生虫の調査は行わず（糞虫検査は行いました）衛生教育と治療が中心でした。

雨季も終わりに近づいていましたがまだ雨は降って

期にわたって生き延びることに原因がありそうです。つまり家の中の寝具を清潔に保たなかったり、衣服に虫卵がついたまま放置しておいたりすると容易に感染を起こします。ですから今回はどのような寝具を清潔に保つか、衣服をどれぐらいに一度洗濯したらよいかなどについて話しました。皆さんは糞虫の糞と糞ではどちらが大きいかわかりますか？学校の子供たちに質問したところ正解が得られませんでした。動物や虫では糞のほうが大きいので誰だろうと言う回答です。帰国後授業で医学部の学生に同じ質問をしたところ正解でまきませんでした。頭はやわらかくしておかなければならないと感心しました。最終日に全員にアルベンダゾールを投与しカトマンズに帰ることとなりました。

ジーパン先生が南部のタライにある熱帯病研究所を見せたいと言いました。時間もありませんし、雨に降っていました。本心では雨季であるしなんとなく気が乗りませんが折角の機会をさそいで。こんな機会もないだろうと思っていました。ところがこのあとが大変でした。タライに入るとまず出んばに突っ込んだバスの目に入りました。しばらく時間がたっているらし

く人は乗っていませんでした。いやな予感がしながらも研究所を見学しました。研究所は日本ほどとは行かないものの設備は整っており素晴らしいものでした。研究所をあとにしてしばらく出書道を走っていると突然十数人の人たちが車の前に立って進路妨害をしました。なんとあのマオイストだったので。窓をわりやり開けさせました。そしてみんな小さな赤旗を振ってそのうちの一人が何か演説をはじめました。運転手は凍りついて動かないし、みんな押し黙っていました。私は私というという外の人と思われまいように下を向いていました。演説が終わるとそのなかのリーダーらしき人がノートを突き出し寄付しろといっているようです。ジーパン先生が五十ルピー差し出すと少ないと撥ね付けました。次に百ルピーですとそれを受け取りました。みんなで氣勢をあげました。そしてやっ

と解放されました。ところが今度は山道に差し掛かるころ雨が降り出しました。霧と雨で一メートル先も見えませんが片側は崖です。おまけに車のワイパーまでもが壊れてしまい視界がまったく取れませんでした。落ちたら死ぬとみんなが話しながら実は顔面蒼

白でした（暗くてよく見えませんが）。前に行くトラックのテールランプをたよりに少しずつ前進みます。前のテールランプが見えなくなったら前の車が崖から落ちたと言ったことでした。研究所を出たのが四時でしたから七時間あまりかかったことになりました。

今回はいつもと違った訪問になりましたが貴重な体験をしました。みなさん雨季には無理をするのはやめましょう。また今回の訪問を楽しみにしています。お世話になりましたジャイチのみなさまに感謝いたします。

吉林大学医学部感染症学
(熱帯病寄生虫学)
春木 宏介

ネパール情報

五、六年前から、反政府テロ活動をしている「マオイスト」以下マオと略し「マオ」が、八月から政府との対話開始のため、一旦活動を中止してしまいましたが、十一月末から活動を再開し、今度は軍隊へも対象を拡大した為、政府は即刻、マオをテロリスト集団と認定し、国家非常事態宣言の発動と、軍隊の出動を命令しました。

この奥躍が何時迄続くか不明確ですが、幸にマオは今のところ、市民や外国人対象の攻撃はしていません。しかし、先の事は予想不可能です。入国時以下の注意を守って下さい。

・ネパール滞在中、NGO関係者は所属する団体の身分証明書、観光客は旅券を常時携帯。同時に、入国時所属団体及び、白国大使館で必ず助言を受ける。

・非常事態宣言発動期間中は、政府とマオを話題とする会話を、一般人の居る場所ではしない。又、辺鄙な土地への旅、トレッキングは、充分な下調査をする。

・宿泊と夜間外出は、単独行動を取らない。

・不審物を見たら、触らず直ぐその場所から離れる。

・この情報は十二月末現在の、ジャイチネパール支那人からの入電、文責菊池



▶ 質しきで学校へ行かない子供たち



寄生虫駆除薬の飲み方を教える教師

ネパールとの出会い

出村 巖



チトワン国立公園でナラヤ二川のカヌーの川下り。この後ジャングル内を探検。

「農場と学 校訪問の旅」に参加する事が決まり、ネパールの資料をと思い書店に出かけました。ところが、旅行ガイドが少しあるだけで、資料らしきものがほとんどないといふ様子です。周囲の人達からの情報も少ない中で、ど

んな田であろうかと期待と不安の中での出発でした。今回は一般的なツアーとは違い、ネパールの人々の生活をほんの少し見させて頂く意義のある旅の様な気がしました。

山の中のバシユバント学校では、学ぶ事を本当に素直に喜ぶ子供達や、熱心な先生達に出会えました。義務教育があっても、家庭の事情で就学できない子供達もいるとの事、一人でも多くの子供達が正しい教育を受けられる様に願いました。一日の勉強が終わって

帰る途中、山の中のバシユバント学校では、学ぶ事を本当に素直に喜ぶ子供達や、熱心な先生達に出会えました。義務教育があっても、家庭の事情で就学できない子供達もいるとの事、一人でも多くの子供達が正しい教育を受けられる様に願いました。一日の勉強が終わって

帰る途中、山の中のバシユバント学校では、学ぶ事を本当に素直に喜ぶ子供達や、熱心な先生達に出会えました。義務教育があっても、家庭の事情で就学できない子供達もいるとの事、一人でも多くの子供達が正しい教育を受けられる様に願いました。一日の勉強が終わって

国際協力フェスティバルの運営委員に携わって

山田まゆみ

皆様、十月六、七日の日比谷公園でのフェスティバルは如何でしたか？ 私は、この催事に初回から毎年参加させて頂いていますが、今回運営委員を仰せ付けられ、改めていろいろ勉強する事ができました。又、裏方の大変さも加わり、見ることができたので、少し紹介いたします。

NGOの運営委員会は五月八日の第一回編成合わせから十月二十日の反省会まで計七回、コアボランティアの国を身近に感じられる様になりました。私自身も、もう一度ジャイイチの理解と協力を考えて行きたいと思えました。

共に楽しい旅をした皆さん、同行して頂いたジャイイチの方々、現地でお世話になった方々、そして感動を倍にしてくれた素晴らしい天候に感謝致します。

ジャイイチのさらなる御活躍と、ネパールの発展を願いつつ。(石川県金沢市)

訂正
「JAITI二十一号」はじめまして」の文中で誤字を訂正致します。

有村 隆幸様(相模原市)
星野 宏様(長岡市)
茂木 洋子様(佐久市)

第十二回ネパールの農場と学校訪問の旅 参加者募集予告

ご希望の方は、今から日程を組んでおいて下さい。
●日程 十一月十日(日) 十一月二十日(水) 十泊十一日

●費用 二十六万円を予定
●参加条件 一、二日間歩が可能な方。
●主催 東西遊旅行企画 助ジャイイチ

お願い

次の方への郵便物が届きません。新住所をご存じの方は事務局までご連絡をお願いします。カッコ内は旧住所です。

物故者のお知らせ

支援者の方で、当方で把握している物故者を掲載いたします。

ご冥福をお祈りしますと共に、感謝致します。

岩瀬 克郎 十二年七月 (福島県白河市)

編集後記

不老長寿のカギは「粗食」にあるらしいという欧米の最近遺伝子研究の結果が発表された。なんのことはない。昔の日本人の食生活が健康の秘訣なのだ。

牛肉を食った筆句、狂牛病がおこる。成人病がふえる。医療費がふくれあがる。ネパールの友人に大きな声で言えることではない。

先人の築いた、「汁一菜」の精神を誇りを持って見直すよい機会だ。

欧米には欧米の、日本には日本の食卓の基本がある。

(武石村 堀)

「中心となって活動するボランティア」との会合八回。朝からの作業日二回。当日ボランティアへの説明会等。随分と出かける事が多く、食事作りからは解放されました。

フェスティバルの開催目的に則り、七つのプログラムが決定され、私は水先案内チームを担当。構成は運営委員三人(おば様、津島、トリオ)と呼ばれましたが)とコアボランティア十人、当日のみのボランティア十人。

七人。アイディアを出し合い、九月から具体的な準備に入りました。

そして当日、朝一番の仕事は手書きの「水先案内」の帳簿の取り付け、イメーヂキャラクターの大きなイルカの設置。よろず相談コーナーの設置、それから五団体ずつ回るバックツアーを組み、手作りシールを貼ったサンバイザーに小旗の出立ちで案内引率。コアボランティアの方が夜中までかかって作り上げた「ボラ

ンティア情報誌」の有料頒布(ぎりぎりまで頑張り七百部完売し、カンボジア地雷廃絶運動に寄付)等々、何とかアイディアを具体化し実行できたのも、チーム全員で協力した結果だと思っています。終了後の一言ずつの感想で、年輪も職業もまちまちのボランティアの方達が「一体感が持てて楽しかった」と言ってくれました。終わり良ければ……です。参加者の皆様、本当にお疲れ様でした。又、来年お会いしましょう。

(福岡区在住)